

景 / 観 / 文 / 化

NPO法人 景観デザイン支援機構 けいかん・きこう <http://www.tda-j.or.jp>

2015-03-01



目次

- 表紙
「旧中川『川の駅』から見る水上交通と景観」 / (文) 須永 倅子
/ (写真) 栗原 裕
- 見開
TDA NEWS
「都市デザイン交流会フォーラム 2014『隅田川の景観・歴史的橋梁の文化的価値を考える』全2回のフォーラム概要」 / 金子 祐介
- 見開
ランドスケープ事情
「熱帯建築家ジェフリー・パワ：自然と融合する建築の聖地」 / 高橋 徹
- 裏表紙
新シリーズ
地域から「松本」 / 倉澤 聡
- 裏表紙
景観ビジネス最前線 / 榎ベルックス
- 裏表紙
ホワイトボード

旧中川『川の駅』から見る水上交通と景観

川には「河」と「江」があり、船の往来に使われたのは「江」の方だという。江戸の名前の由来である。この江は隅田川（荒川）のこと。家康の入府（1590年）以前は、武蔵野と下総の台地の間は荒川の氾濫流域だった。そのまちづくりと土木工事の周到さは知られている通り。河川の流れを変え、利根川の東遷を行い、大川と呼ばれた隅田川が確立した。幕末期、江の両側に関東一円から物資が集められ、流通網が張り巡らされ、明治期になると汽船の普及と共に、川が沿線の住民が乗る船の運航路ともなった。物資の大量輸送も可能となり、政府の殖産興業政策に寄与し、川の景観も変化していった。「明治40年代前期東京の河岸図^注」によると、141の河岸が挙げられている。河岸とは共同の荷揚げ場のことで、川沿いを線上に続いていた。その後、江東地域も大工業地域となり、地盤沈下が進む1950年代頃まで川には船があった。注：（一社）東京都港湾振興協会発行

度重なる水害や地盤沈下による護岸のかさ上げにより、人々が遠ざかった川がまた動き始めるのが1970年代。治水のため、江東低地の河川を水門などで締切り、水位を低下させた。都は旧中川の護岸の修景整備に手をつけ、昨年完成。小名木川、横十間川も整備を始めた。真っ直ぐな人工河川沿いに遊歩道が整備され、利用者は増えた。仕切られ池状態の水面は昔と変わらない都市軸をなし、カヌーやレガッタなどの手漕ぎを楽しむ人々のうってつけの航路となった。スカイツリーオープンで観光船も呼び込み、昔とは違う水上交通を復活させている。旧中川からの小名木川入り口には、「川の駅」ができ、水陸両用バスの入水スロープを含む拠点づくりが進められている。時代と共に変容してきた川は、今、一般市民を巻き込み、新たな活用場として生まれ変わろうとしている。川から見える景観を整えるきっかけになることを期待したい。

特定非営利活動法人江東区の水辺に親しむ会 理事長 須永 倅子



●シミュレーションCG（弁柄色）



●シミュレーションCG（緑色） 協力：園デジタルキアロ

家を含め総勢132人の参加者を11のテーブルに分け、各テーブルごとに1人のファシリテーターを置き、テーマを議論していただいた。

どのテーブルから出てくる意見も「浅草寺を含めた浅草界隈の都市景観の中の橋のあり方について考えたい」「橋の色と形態の関係を問題視すべきだ」「もっと歴史的に都市の中での橋の色を考えよう」というように、今回の吾妻橋の塗り替えにあたって色の検討をするだけでなく隅田川河川全体や下町の都市景観の問題としてトータルに橋の色彩を考えていくにはどうしたらいいのかという議論が交わされるなど有意義なワークショップとなった。



●会場でのワークショップの様子（会場風景）

3 ワークショップ

11テーブルのファシリテーターによるまとめの一部をご紹介します

●ファシリテーターの一人、須田武憲氏（JUDI事業委員長/GK設計㈱）のまとめ

吾妻橋の色彩の議論に入る前に、そもそもの隅田川全体や浅草・吾妻橋地区全体の色彩の考え方や位置づけをきちんと整理した方が良いとの意見がありました。また、歴史的橋梁の文化的価値を考えるとすれば、復興遺産としての歴史的価値についても議論を深めるべきとの意見などでもていました。

●その他のテーブルの意見（抜粋）

- ・国際的な遺産として吾妻橋や隅田川の景観を考えるべきなのか、地域に根ざしたのものとしての景観を考えるべきなのかをまず決めるべき。
- ・浅草寺などに配慮し、都市計画上でも全体的に色彩計画を考えるべきだろう。
- ・利用者にとってわかりやすいランドマークとなることも考えるべきだ。
- ・文化的価値からみていくのであれば、オリジナルの色に戻すべきなのではないか。
- ・創建時の色に戻すことも良いが、現代の都市景観にそぐうかという疑問はある。
- ・赤系の色であるにせよ、弁柄色などを検討した上で、今の赤の色が良いのか検討すべき。
- ・赤だけではなく色も見てみたいのでシ

ミュレーションを多くみたい。

- ・高欄の支柱や手摺のみ赤を使うというように部位ごとに色を使い分けることも考えるべきではないか。
 - ・アーチの下部も考え船上から見た橋の色のあり方も考えるべきではないのか。
 - ・隅田川にかかるすべての橋の色をトータルに考えるべきではないのだろうか。特に全体の彩度を落とした方が良い。
 - ・隅田川沿岸の広告物のあり方も考えないと、橋だけ良くしても景観は良くならないので、他の景観を構成する要素のシミュレーションもみたい。
 - ・護岸の植栽や手摺りなども一緒に考えた方が良いだろう。
 - ・色彩を決めるプロセスを重要視して公共に公開して欲しい。
 - ・歩行者の視点からも景観を考えるために、舗装の敷き方や照明灯の明るさ及び色も考えるべき。
 - ・観光客の視点と住民の視点と分けてデザインや色彩を考えるべきではないか。
- など、11テーブルからは様々な意見が寄せられた。なお、全2回のフォーラムの内容は後日報告書にまとめられる予定。



●会場でのワークショップの様子（テーブル風景）

高橋 徹 クリエイティブスタジオ代表 / TDA 正会員



テラスから眺める前庭と入江の景観。夕陽が素晴らしい



広大な敷地の風景は全て繊細にデザインされたもの

で、サーフィンにぴったりの波が碎けるインド洋の風を感じながら過ごすリゾートです。

●土地の持つ気候や地形を最大限に活かし、かつ絶妙に創りあげたルヌガンガ

バワが自分の理想郷として、入江を望む見晴らしの良い敷地に、1948年から1998年まで50年かけて創った私邸。母屋の他は自分の仕事場や私的な客を招く小さな建物を点在させ、それを客室（全6室）として11月から4月の間だけ期間限定でオープンしています。熱帯の木々の中に見え隠れする建物は全てが自然のなかに溶け込みます。しかしその田園風景も実はデザインされ、長い年月の中でつくられた人工林です。バワの建築とランドスケープは現場の中で繊細な修正がされながら、いかにもそれが自然にあったかの如くデザインされています。建物自体はどれも小さいもの達ですが、内部と外部の境界が曖昧にされ、それらが土地の微細な気候や地形を考えて絶妙に配置されています。母屋前の庭のマグノリアの巨木も実は盆栽仕立てです。広い庭園の中には読書や歓談のための東屋や散策路が縦横に設けられています。インテリアも白と黒が基調の色彩で、屋内外に自分が気に入ったアンティークとアートでさりげなく満たされ、自らの理想が妥協することなく貫かれています。この場に身を置くと心地よさとともに「建築やランドスケープとは形のデザインではなく、その中を廻る空間的・視覚的体験である」ことを教えられ、まさに自然と融合する建築の聖地であると思います。

都市デザイン交流会フォーラム 2014
『隅田川の景観・歴史的橋梁の文化的価値を考える』
全2回のフォーラム概要
TDA 正会員 金子 祐介

2014年12月21日、TDAとJUDI（都市環境デザイン会議）の共催で、都市デザイン交流会フォーラム2014パート2が墨田区のすみだリバーサイドホールで開催された。第2回目にあたる今回のフォーラムは、2014年2月22日に行われた第一回目の都市デザイン交流会フォーラム2014を引き継ぐかたちで、「隅田川の景観・歴史的橋梁の文化的価値を考える2」としてテーマが設けられ開催された。2回にわたるフォーラムの概要を俯瞰してみたい。

1 第1回 2014/2/22
於：浅草観光文化センター

第一回目は、中井祐氏（GSデザイン会議／東京大学教授）により隅田川の橋の歴史を中心として墨田川河川敷の景観について『隅田川に架かる著名橋が作り出す景観』と題して基調講演をしていただき、中野恒明氏（JUDI／芝浦工業大学教授）からは完成当時の吾妻橋の色彩の再現に関する報告、小林正美氏（TDA／明治大学教授）からは海外の橋の事例、さらには東京都都市整備局・景観担当者から現在の都の橋梁の色彩計画に関わる行政的スタンスのプレゼンテーションが行われた。その後、パネルディスカッションを行い、台東区や墨田区の区民の方々並びに専門家を交え、吾妻橋の塗り替えにあたって提案を検討する運びとなった。

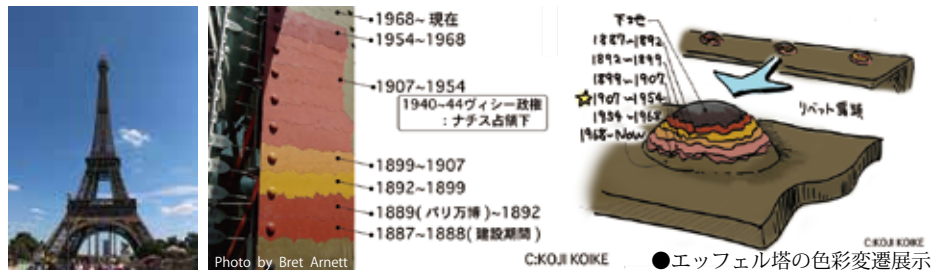
この模様は、読売新聞（2014年4月8日）やテレビ朝日『モーニングバード』（4月11日）、フジテレビ『スーパーニュース』（5月13日）にて報道していただき話題を呼ぶこともできた。詳細については本紙24号参照。

2 第2回 2014/12/21
於：すみだリバーサイドホール

第二回目は、第一回目の報告を行った後、基調講演として杉山朗子氏（TDA・JUDI／日本カラーデザイン研究所景観事業部長）より江戸期の都市における伝統的な色彩計画について解説いただいた。また、第一回目と同様に中野氏に登壇頂き吾妻橋の色彩の変遷について解説いただいた。そして、最後に吉田慎悟氏（TDA・JUDI／武蔵野美術大学教授・色彩計画家）より世界の都市景観における色彩計画の事例報告をいただいた。また、吉田氏の報告の中では、小池公二氏（TDA）に登壇いただき、エッフェル塔の色彩の変遷とその歴史的遺産としての色彩の変遷の公開活用事例の報告も行った（下図参照）。

こうした事例をもとに「今後、どのように吾妻橋の色彩（ひいては街の色彩景観）について考えれば良いのか」というテーマを、(株)デジタルキアロの全面協力で作成された吾妻橋の色彩シミュレーションを見ながら全体ワークショップが行われた。

墨田区や台東区の区民の方々並びに専門



ランドスケープ事情

熱帯建築家ジェフリー・バワ：自然と融合する建築の聖地



岩山の一部を削り抜いたように自然と一体化した建物



時と共に森に埋まる建物と水面が湖とつながるプール

ジェフリー・バワ（1919～2003）はスリランカを代表する建築家。日本ではあまり知られていませんが熱帯建築、トロピカル・アーキテクチャーとして世界では有名でアジアの建築家達に大きい影響を与えています。「自然との一体感」、「自由奔放な建築とランドスケープ」はリゾート建築のあり方に変革をもたらし、世界の最高級リゾート「アマンリゾート」がお手本としているといいます。本年1月に訪れた三つのホテルからそのハイライトを紹介します。

●森に還り、自然と一体化していくヘリタンス・カンダラマ

湖に面した深い森の中にそのホテルはあります。岩山を削りぬいて造り、周りのジャングルの樹々に埋もれ、時の経過とともに森の中に還っていくような建物です。斜面の中段に沿って線状に1km弱の建物ですが、屋内にも岩盤が剥き出しになったホールや廊下、前方の湖と水面が繋がるように見えるプール、客室は樹の枝や蔓によるスクリーンで囲まれ、人が濃密な自然の中で過ごす造りです。

●ひたすら海の風を感じながら過ごすライトハウス・ホテル

16世紀ポルトガルが築いた要塞都市のイメージの石造りで囲まれた螺旋階段を登ると、ロビーはいきなり視界が開いて、エメラルド色のインド洋が目飛び込んできます。外壁の色はマサラカラーで彩られ、明るく開放的でシンプルなディテールのロビーや客室

「松本」

その1
都市計画家 倉澤 聡



松本では、これまでも景観に対する様々な取り組みが行われてきた。例えば、昭和47年の大谷レポートを基にした松本城からの北アルプス等の山並みに関する眺望保全などを考えてみても、景観を語る文化はそれなりに育てられてきている都市であると思っている。しかし、それが十分というには程遠く、現状として景観創造と景観保全の両面において、都市空間をよりよく変える成果とまでは至っていない暗中模索が続いている。

景観の評価や感じ方は、人の感性や心に根差す主観的なものかもしれないが、都市や地域という人が集まり暮らす場において、それぞれの都市や地域が景観の価値を生み出す土壌としては、景観の創造や保全に関わる主観を共有化し、客観化を図れるような日常のまちの文化が大切だ。この点をどう育むかについて松本では建築家や大学関係者、商業主、行政の方、松本を外から見られている方など様々な視野を持つ人たちが、そして市民や子ども達と一緒にコミュニケーションができる機会の提供を図っている。例えば、町を歩きながら対話を生み出す機会を提供することや、講座やワークショップによって景観に関連する価値観を問うという活動が地域にも広がりつつある。

一方、地方都市の変遷を紐解いていくと、景観の問題というより、そもそも、都市としての活動自体、暮らす、働く、遊ぶといったことが貧相になっていることが問題である。例えば、松本の中心部は、現在は郊外の低層住宅地と同程度の人口密度であり、仕事の数も少ない。昭和30年代から急速に人口は減少し、そして最近では町並みの家々が空地化や駐車場化が急速に進んでいる。暮らす人と働く人が少ないため、生活を支える商業も空洞化が進んでいる。これからの美しい景観を育むには、松本の様々なステークホルダーと共にこのような現況を問い、これからの都市活動をどのようにしたいのかと一緒に景観も考え、景観を生み出すプロセスに対して問題設定と課題設定を適切に行うこと自体が重要になっている。工芸の五月という企画や各種の講座やワークショップなどの実践を通して、景観を生み出すプロセスから考え行動する重要性を感じている方々が増え始めており、徐々に問題や課題の適切な設定が行える環境になりつつあると感じている。実際の都市空間がより良く変化するという成果にはまだ至っていないが、美しい都市をつくるには、人の意識変革にも関わるこのような地道な取り組みも重要だと考えている。

景観ビジネス最前線

http://www.bellrx.co.jp

水の景色、人集う

…水景設備のベルックス

株式会社ベルックス
〒154-0016 東京都世田谷区弦巻 3-13-18
TEL03-5450-2231 FAX03-5450-2232

ホワイトボード

求む地域からの活動報告 今号から、Q&Aのコーナーを<地域から>という新しいシリーズに進化させることにしました。それぞれの街、地域は異なった課題、異なった活動をし、よりよい景観をつくろうとしています。これらを全国に発信し、さらにそれら

の情報が相互に活動を補完し合うきっかけをつくれたらと考えたからです。今回の「松本」からの話題は、2回の掲載を予定しています。なお景観形成にまつわるさまざまな活動の情報を是非事務局にご提供いただきたく読者の皆様にお願ひ申し上げます。